

村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』

——物語構造からみる結末の選択——

上 田 早 弥 子

一 はじめに

『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』（以下「世界の終り」と表記）は村上春樹四作目の長編小説（新潮社・一九八五・六）である。それ以前に発表された「風の歌を聴け」（『群像』一九七九・七）、「一九七三年のピンボール」（『群像』一九八〇・三）、「羊を巡る冒険」（『群像』一九八二・八）は後に初期三部作と呼ばれ、次いで書き下ろされた長編小説である「世界の終り」は、そこから一歩脱した新たな境地で書かれた小説として発表当時から注目度も高く、今でも村上春樹の代表作の一つとしてたくさんの研究が行われている。

『世界の終り』の一番の特徴は、「ハードボイルド・ワンダーランド」（以下〈ハードボイルド〉と表記）と「世界の終り」（以下〈世界〉と表記）という二つの物語を、奇数章と偶数章ではつきり分けて交互に展開させていく作品構造である。研究においては、〈ハードボイルド〉と〈世界〉の対立、関係性について注目が集まることとなる。

鈴木和成氏は「世界の終り」が静止空間であるのに対して、

「ハードボイルドワンダーランド」が速度の空間である（略）二者は（略）パラレルな二つの世界」として、二つの世界を「時間」の視点から読み解いた。しかし、遠藤伸治氏が「対立が、そもそもこの作品の中に少しでも見出せるのであろうか。」と問題提起をし、「二つの世界に対立はなく、逆にそれらは似通っているのではないだろうか。」と述べた。遠藤氏は「影」を「私」の切り離れた過去の記憶であると位置づけし、「古いアイデンティティー・世界観を凍結し、世界から切り離れた主人公が、その結果として孤独となった後、組みなおされたアイデンティティー・世界観を取りもどすことによって、自己と世界との関係を結び直そうとする物語である」とした。また、山根由美恵氏は〈世界〉を「静的」な、〈ハードボイルド〉を「動的」な世界として捉え、この二つの世界は「物語の最後までパラレルの位置のままという一貫した構造である」とは言い切れず、「テキストの展開に従って二つの世界の性質が反転していく」と新たな見解を呈した。そして、この「世界の終りと始まりが繋がって一つの世界を形成する」（「ウロボロス」の概念）が流れているのではないかと述べた。浅利文子氏は「世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド」のパラレル・ワールドは、「私」

と「僕」の背負わされた重圧を合わせ鏡のように映し出し、「私」と「僕」をアイロニカルに対照している」とし、二つの世界の対立を認めた上で「一貫して「私」と「僕」が「ハードボイルド・ワンダーランド」と「世界の終り」それぞれのシステムの重圧下で、いかに自己を持ちこたえ、いかに失われた自己を見出してゆくか」という物語であると読んだ。このように、「世界の終り」にとつて二つの世界の関係性を考えることは、物語全体の方向性を考えることに直結し、その為に決定的な結論が導き出されていないのが現状である。

本論では作品をより細かく検証するため、「ハードボイルド」と「世界」に共通して登場する「ペーパークリップ」「ダニーボーイ」「獣の頭骨」に注目して二つの世界の関係性を解き明かし、その関係性をふまえた上で「ハードボイルド」の「私」が消失し、「世界」の「僕」が壁に囲まれた街に残るといふ「世界の終り」の結末はどのような意味を持つのかについて考えていきたい。

二 作品構造

1 作品中に書かれた二つの世界の関係性

〈ハードボイルド〉と〈世界〉がどのような関係にあるのかについては、作品中に説明がある。〈ハードボイルド〉25章工場（ファクトリー）から逃げる博士を救出した場面で、「私」は組織（システム）と博士が行った実験の結果、「私」の中に人工的に意識の核を埋め込まれ、今それが暴走して自意識を呑みこもうとしている（「私」の意識が消失する危険）ことを教えられる。博士や組織がそのようなことを行つた訳を、博士は次のように説明する。

「（略）そこで私は考えました。完璧な暗号というものはひとつかない。それは誰にも理解できないシステムでスクランブルすることです。つまり完璧なブラックボックスを通して情報をスクランブル（略）するわけですな。（略）」

「つまりそのブラックボックスとは人間の深層心理であるわけですね」

「そう、その通り（略）もつと簡単に心と呼んでもよろしい。（略）（ハードボイルド）25章）」

つまり、博士や組織は敵対する工場が絶対に盗み出せない暗号を作るため、人間の無意識の領域である深層心理に目をつけるのである。そのために「私」の中に埋め込まれたのが「ブラックボックス」であり、「ハードボイルド」においては「ブラックボックス」がすなわち「心」と定義されていることがわかる。つまり「私」には実験のため、ある瞬間で固定された「心」が脳内に存在しており、それが〈世界〉なのだとはっきりと書かれている。

その後、〈世界〉は「私」にとつてどのような場所なのかについても言及される。

「要するにそれがあなたの意識の核なのです。あなたの意識が描いておるものは世界の終りなのです。（略）そこには時間もなければ空間の広がりもなく生も死もなく、正確な意味での価値観や自我ありません。（略）」

「しかしあなたはその世界で、あなたがここで失つたものをつりもどすことができるでしょう。（略）あなたが失つたものをつ

べてをです。それはそこにあるのです。(「ハードボイルド」 25章)

《世界》は、「私」の「失ったものすべて」を取り戻すことができる場所だと書かれている。つまり「私」は博士や組織によって(「ハードボイルド」世界で「心」の無い状態で生きており、一方《世界》は「私」の内面世界で、「僕」は「私」の現身、同一人物であったことがここで確認されるのである。

2 二つの世界の時系列

浅利文子氏は『世界の終り』について「全40章のストーリーを時間の経過に沿ってたどると、「ハードボイルド・ワンダーランド」のストーリーは、「私」の意識が「消滅」する39章から2章へつながり、「世界の終り」の「僕」のストーリーに引き継がれている⁽⁵⁾」として、《世界の終り》は(「ハードボイルド」の「私」が消滅した後の話であると読んでいる。しかし、村上春樹自身が川本三郎氏との対談で「一つの極端な読みでいえば、《私》のほうだけ読んで、《私》が最後に死んだところから、今度、死後の世界として、《僕》の世界のほうに入っていくという読み方も可能かもしれないですね」という川本氏の問いかけに「でも、あれはリアルタイムで一応続いていますから、やはりそれだと読みにくいんじゃないでしょうか」とはっきり否定している。この村上の返答について、浅利氏は「作者は「ハードボイルド・ワンダーランド」と「世界の終り」の時空間を往復しつつ、二つのストーリーの絡み合いのうちに「私」と「僕」が徐々に同一人物として重ね合わされてゆく機微を読者に

味わってほしいと考えたのだろう」と述べている。しかし、この時の村上の川本氏への返答が表わすものは、単に読者が物語を読む際の楽しさやそのためのギミックについて言及したわけではなく、やはり物語の大前提として《世界》と(「ハードボイルド」は同じ時間軸にあること、一人の人間の中と外で同時進行している物語であることを今一度表明しなかったのではないだろうか。

《世界》と(「ハードボイルド」の「私」と「僕」は『世界の終り』の中で一度も直接的に接触しない。だがそれは、二つの世界が全くの無関係であるということではない。(「ハードボイルド」の「私」の行動は、《世界》の「僕」に影響を与えているのである。そしてまた、《世界》の「僕」が(「ハードボイルド」の「私」に影響を与えることもある。そこがこの『世界の終り』の二つの世界の関係性を探る大きなポイントになる。それを解明するためにまず、二つの世界に共通して登場するものが、どのような働きをしているかについて確認していきたい。

三 二つの世界を繋ぐもの

前章で、二つの世界の関係性は(「ハードボイルド」25章にはつきりと示されていると述べた。しかし、『世界の終り』の読者は、この章を一つの確認作業として読んだはずである。というのも、『世界の終り』は25章以前に二つの世界が繋がっている可能性を示唆するさまざまな要素が描きこまれているからである。その中でも特に印象的に使われているのが、「ペーパー・クリップ」「ダニー・ボーイ」「獣の頭骨」の三つであろう。

1 「ペーパー・クリップ」

まず、「ペーパー・クリップ」が担った役割について考えていく。「世界の終り」で「ペーパー・クリップ」が初めて登場するのは、「ハードボイルド」3章である。

部屋には家具らしい家具はほとんどなかった。(略) 余分なものは何一つとしてない。

窓のわきに大きなデスクがあった。(略) その側にはペーパー・クリップがひとつかみちらばっていた。

(「ハードボイルド」3章)

これは、「私」が初めて博士の研究所の応接室に通されたときの描写である。「余分なものは何一つとしてない」とわざわざ説明された部屋に、「ペーパー・クリップ」は意味ありげに登場する。そして、3章ではもう一度「ペーパー・クリップ」が登場する箇所がある。

彼は(略)執務用のデスクのうしろに腰を下ろした。部屋の作りは私が最初におとされた部屋とまるで同じだった。(略) デスクの上には卓上カレンダーがあり、ペーパー・クリップが同じようにちらばっていた。

(「ハードボイルド」3章)

場所は地下に設えられた博士の研究所の部屋に移るが、「ペーパー・クリップ」はやはり机の上にちらばっている。そして、この後博士は「私」と商談をしながら、「ペーパー・クリップ」を左手

人差し指の爪の甘皮をつつくのを使う。それを見た「私」は「この次なにかに生まれかわることができるとしても、ペーパー・クリップにだけはなりたくないと思った。(略)」と感じるのだ。読者の視点としては、この時点で「私」が消失の危機に瀕していることなど知る由もないが、ここで「私」が「なにかに生まれかわる」という発想をしているということは興味深い。

3章はこうして、「私」と博士のシャフリング(暗号作り)に関する話し合いで終わる。そして続く4章で、「世界」にも「ペーパー・クリップ」が登場するのである。

カウンターのの上には銀色のペーパー・クリップがちらばっていた。僕はそれを手にとつてしばらくもてあそんでから、テーブルの椅子に腰を下ろした。

彼女はそう言って紙ばさみをカウンターの上のペーパー・クリップのとなりに置いた。

(「世界」4章)

これは「世界」の「僕」が、「夢読み」の仕事をするために初めて図書館を訪れる場面である。また、これは「世界」の登場人物の中でも非常に重要な図書館の「彼女」が初めて登場する章でもある。そんな場面で、何とはなしに「僕」の目に留まるのは、カウンターの上の「ペーパー・クリップ」なのである。そして、さらに「ペーパー・クリップ」は4章で以下のように意味ありげに弄ばれる。

「じゃああなたは自分がどこで何をしていたかわかるの?」「思

い出せない」と僕は言った。そしてカウンターに行つて、そこにはばらばらとちらばつていたペーパー・クリップをひとつ手にとつて、それをしばらく眺めた。

（世界 4 章）

外の世界から来たのに、前にいた世界のことを思い出せない「僕」は、わざわざカウンターに立つて「ペーパー・クリップ」を手にとつて眺めるのである。全く毛色の違う二つの物語が交互に展開され、その世界の関係性を思案し探りながら『世界の終り』を読んでいる読者にとって、「ペーパー・クリップ」はとても意識の外に置いてはおけない重要なファクターとなる。そして、次いで7章に書かれたこの場面で、恐らく読者は想像を確信に変えるであらう。

それからペーパー・クリップが七個か八個ちらばつていた。どうしてこんなにいたところにペーパー・クリップがあるのか、私には理解できなかった。（略）クリップはまるできちんと計画されたみたいに、私の行く先々に、目につきやすいようにちらばつてゐるのだ。何かが私の頭にひっかかつていた。このところ、いろんなものが頭にひっかかりすぎる。獣の頭骨やペーパー・クリップや、そういうものだ。

（ハードボイルド 7 章）

これは（ハードボイルド）世界で「私」が調べもののために図書館に行つた場面での描写である。このように、「私」が「ひっかか」る存在として意識することで、「ペーパー・クリップ」は二つの世界が何らかの形で繋がっていることを匂わせるギミックになつてい

る。

さて、その「ペーパー・クリップ」だが、それは『世界の終り』において、ただ二つの世界の繋がりを匂わせるだけのものではない。証拠に、（ハードボイルド）ではその後幾度も登場する。

ひっくりかえされた机の前にはペーパー・クリップが一箱分ちらばつて（略）私は以前からペーパー・クリップのことが何かしら気になつていたので、（略）それをひとつかみズボンのポケットにつつこんだ。

（ハードボイルド 19 章）

「（略）私はここまでくる道筋に、ほら、金属片を撒いておつたでしょう？ あれをやつとくとやみくろが嫌がるわけです。（略）」「金属片というのはペーパー・クリップのことですか？」と私は訊いてみた。

「そうそう。ペーパー・クリップがいちばん適しておるのです。（略）」

（ハードボイルド 27 章）

これらは全て「私」と博士の孫娘が博士を救出しようと画策する場面での描写である。このように、（ハードボイルド）世界では「ペーパー・クリップ」は「やみくろ」を退ける効果があるとされていることがわかる。「やみくろ」とは、地下に住み人間を襲う得体のしれない化け物のことである。この「やみくろ」という存在は、非常に現実的で具体性のある描写の多い（ハードボイルド）にとつて、最後まで明確な正体のわからない抽象的な異形の存在である。「ペーパー・クリップ」は、それを退け、「私」の身を守るものであ

る。得体のしれない運命に今まさに呑み込まれようとしている「私」にとって、「ペーパー・クリップ」は一つの希望の象徴という存在にもなっているのではないだろうか。

2 『ダニー・ボーイ』

次に、作中何度か登場する『ダニー・ボーイ』という唄について考えていく。

『ダニー・ボーイ』はアイルランドの民謡で、「ロンドンデリーの歌」として知られる旋律に歌詞を付けたものである。『世界の終り』では、初めに〈ハードボイルド〉1章に登場する。

エレベーターはあらゆる音を吸いとるために作られた特殊な様式の金属箱であるようだった。私はためしに口笛で『ダニー・ボーイ』を吹いてみたが、肺炎をこじらせた夫のため息のような音しか出てこなかった。
(〈ハードボイルド〉1章)

これは博士の研究所（応接室）へ行くためのエレベーターに乗っている場面で、口笛を吹いた理由はエレベーターの吸音性を確かめるためであり、『ダニー・ボーイ』という選曲も特に大きな意味もなく行われたように見える。しかし、『世界の終り』にはたくさんの曲名が登場し、中でも『ダニー・ボーイ』は初めて作品中に登場した曲名であることを覚えておきたい。

『世界の終り』において、「唄」は非常に重要な意味を持つものである。「やみくろ」が潜み、五感が全て奪われたような錯覚に陥る暗闇を進む〈ハードボイルド〉。「私」は、21章では博士の孫のア

ドバイスで様々な「唄」を唄うことで意識を保とうとし、29章でも口笛を吹くことで闇に呑み込まれそうになる自分を鼓舞する。また、自身や愛する彼女に「心」がないことを知って、どうにか「心」を取り戻そうとする〈世界〉の「僕」も、22章で「駄目だ。唄を思いつけない」と、「唄」と「心」に大きな繋がりを感じている発言をしている。

21章、29章では様々な曲名が登場するが、その中に『ダニー・ボーイ』は登場しない。しかし、「私」が自身の意識が消失する運命を知らされた状態である35章で、『ダニー・ボーイ』は再び私によつて口ずさまれる。

私はビング・クロスビーの唄にあわせて『ダニー・ボーイ』を唄った。

「その唄が好きなの?」

「好きだよ」と私は言った。「小学校のときハーモニカ・コンクールでこの曲を吹いて優勝して鉛筆を一ダースもらったんだ。
(略)」

彼女は笑った。「人生というのはなんだか不思議ね」

「不思議だ」と私は言った。
(〈ハードボイルド〉35章)

これは、「私」が意識消滅前の最後の一日を、図書館で出会った女性と過ごしている中での出来事である。「私」の『ダニー・ボーイ』に対する思い入れは、「私」が語った思い出だけを見れば小さいもののように思えるが、しかしこのタイミングで再登場することで、〈世界〉に大きな影響を与えたように見えるのである。

「手風琴」そのとき何かがかすかに僕の心を打った。ひとつの和音がまるで何かを求めているように、ふと僕の中に残った。(略) メロディを探すのには少し手間がかかった。

が、最初の四音が僕を次の五音に導いてくれた。(略) それは唄だった。(略) それは僕がよく知っているはずの唄だった。

『ダニー・ボーイ』 (世界) 36章

35章に続く36章で、〈世界〉の僕はついに、「心」と密接に関係している「唄」を思い出す。その思い出した唄こそが、「私」が「好きだ」と語った「ダニー・ボーイ」なのである。これをきっかけに、「僕」は〈世界〉でも「心」を取り戻すことができる、という希望を見出す非常に重要なシーンである。(ハードボイルド) 21章、29章で意識を保つために何でもいいたから「唄」を思い出して歌う、という「私」と、〈世界〉22章で「心」がないから「唄」を思い出せない、と嘆く「僕」は逆説的に繋がっている。つまり、前後不覚な暗闇に吞み込まれそうになりながらも、「唄」を思い出せるのは「私」に意識(ここでは自己と読み替えてもよいだろう)が残っているからであり、〈世界の終り〉の「街」のルールに則って「心」を失った「僕」は、「唄」も同時に喪失しているのである。「僕」を覚醒させるのはやはり「私」として大切な、意識の中に浮上する「唄」なのだ。「ダニー・ボーイ」を通じて、〈ハードボイルド〉での経験は、〈世界〉に影響を及ぼすことがここからわかる。

3 「獣の頭骨」

しかし、〈ハードボイルド〉での体験が〈世界〉に影響を与える

という関係は、〈世界〉が〈ハードボイルド〉の「私」の内面世界である以上当たり前とも言える。問題は、『世界の終り』において〈世界〉から〈ハードボイルド〉へ影響を与えている場面があることだ。これについて考えるため、やはり二つの世界に共通して登場する「獣の頭骨」に注目してみる。

〈世界〉は2章から始まるが、その最初の章に書かれているのは「獣」についてである。「街」が高い壁に囲まれていることについてや、「影」を切り落とさなければ「街」に入れない、といった特殊な世界を説明するより先に、「獣」の外見的特徴や生態、一日の過ごし方について詳しく描写されるのである。この、金色の毛と一本の角を持ち、草を食む「獣」が〈世界〉にとって重要な要素であることがわかる。

一方、〈ハードボイルド〉3章では、博士の持つ特殊な趣味について次のように書かれている。

部屋の奥の壁は一面棚になっていて、そこにはありとあらゆる哺乳動物の頭蓋骨が所狭しと並んでいた。

(ハードボイルド) 3章

このように、〈ハードボイルド〉では生きた動物が登場しない代わりに、まずあらゆる頭蓋骨が登場する。また、それを博士が収集する理由について、博士は以下のように説明している。

「私の場合、骨から出てくる音を聴きとるまでにまるまる三十年もかかったですよ。」(略)「それぞれの骨にはそれぞれ固有

の音があるです。(略) 文字通りの意味で骨は語るのです。」

(〈ハードボイルド〉 3章)

博士の専門は生物学であり、特に興味があるのは、動物がそれぞれ固有に持つ「音」だという。そのため、あらゆる動物の頭蓋骨を集めそこから出る音の違いを研究している、というが、このそれぞれの骨が固有のものを持つ、というイメージは〈世界〉にも登場する。

「これは街にいる一角獣の頭骨だね？」と僕は彼女に訊いてみた。彼女は肯いた。

「古い夢はその中にしみこんで閉じ込められているの」と彼は静かに言った。

(〈世界〉 6章)

〈世界〉で、「街」に入った「僕」は「夢読み」という仕事を任せられ、図書館の彼女からその仕事内容を説明される、というのが6章の内容だが、そこで「僕」は「夢」が「一角獣の頭骨」に閉じ込められていること、頭骨がそれぞれ閉じ込めている固有の「夢」を読み分けていくことが「夢読み」の仕事だと教えられるのである。この構図は、博士があらゆる動物の頭蓋骨から固有の音を抽出しようとしている姿と重なる。また、「僕」の仕事に「一角獣の頭骨」が必須であるということがわかったところで、続く7章、〈ハードボイルド〉世界にも「獣の頭骨」が登場するのである。

ガムテープと新聞紙を丁寧にはぎとった。その下から現れたの

は動物の頭骨だった。

(〈ハードボイルド〉 7章)

「獣の頭骨」は、博士から送られてきたプレゼントという体で「私」の手に渡る。また、同じく7章で、「私」は「じつと眺めているとその頭骨には何か見覚えがあるような気がした」と、二つの世界を繋げる決定的とも言える一言を述べている。さらにその後、「私」はこの「獣の頭骨」の奇妙な特徴に気付くのである。

私は指の腹でくぼみの中をそつとなでまわしてみた。(略) まるで何かが暴力的にもぎとられたような、そんなかんじだった。(略) 角？

もしそれがほんとうに角だとすれば、私が手にしているのは一角獣の頭骨ということになる。

(〈ハードボイルド〉 7章)

〈世界〉の存在であるはずの「獣」が、〈ハードボイルド〉にもついに現れるのである。7章では改めて、「私は一角獣の頭骨を手に入れた」とあえて太字でこの事実が表記される。〈ハードボイルド〉に「獣」が登場することに、非常に大きな意味があるのだということがわかる。

「獣」に関する出来事は、〈ハードボイルド〉に先んじて〈世界〉で登場している、つまり〈世界〉の影響を〈ハードボイルド〉が受けているように見える。決定的なのは次の引用部分である。

頭骨が光っているのだ。(略) その光は春の陽光のようにやわらかく、月の光のように静かだった。棚の上に並んだ無数の頭

骨の中に眠っていた古い光が今覚醒しているのだ。

（世界） 36章

これが起こったのは、「僕」が『ダニー・ボーイ』を思い出した直後である。つまり、「僕」が「心」の一端を取り戻したことに、「獣の頭骨」が反応し覚醒したという重要な場面である。これがきっかけとなり、「僕」は自身と「彼女」の「心」を取り戻せるという可能性にかけて「街」に残る、という選択をするのである。

次に、37章を見てみる。

（略）テーブルの上でクリスマス・ツリーのように光っているのは私が持ってきた一角獣の頭骨だった。光が頭骨の上に点状にしているのだ。（略）その小さな光が頭骨の上にまるで満点の星のように浮かんでいるのだ。光は白く、ほんのりとしてやわらかだった。

（ハードボイルド） 37章

このように、「獣の頭骨」が二つの世界で全く同じ反応をしていることがわかる。それは（ハードボイルド）において〈世界〉の再現が行われているのだ。これは二つの世界が繋がったということであり、また内面世界であるはずの〈世界〉が現実世界である（ハードボイルド）に影響を与えたという図でもあるのだ。

山根由美恵氏は、主にやみくろに追われる地下世界でのシーンについて検討し、『世界の終り』が逆転して『ハードボイルド・ワンダーランド』の性質へと転換し、『ハードボイルド』の冒頭に繋がる同様に『ハードボイルド』が（略）『世界の終り』冒頭に繋がる。

これは、『世界の終り』の「僕」が『ハードボイルド・ワンダーランド』の「私」になり、また『世界の終り』の「僕」になることであるとして、〈世界の逆転〉を説いた。しかし、それはあくまで「このテクストの構造は（略）これまでの一回性の物語として捉える見方としては不十分で、（ウロボロス）という無限円環であると言えはしないだろうか。（略）二つの世界を永遠に回り続ける（略）互いの主人公は失い続ける人生を送る」という見方に則ったものである。無限円環という考え方については、前項で述べた「二つの世界は同じ時間軸で同時進行に進んでいる」という前提に矛盾するため、やはりこれはある一定の結末を迎える物語であるのだと思う。しかし、「獣の頭骨」を注視してわかったように、意識の核が（ハードボイルド）から〈世界〉に移っていく、という物語展開は疑いようがない。その点において、〈世界の逆転〉は起こっていると考えられる。（ハードボイルド）で「心」を〈世界〉として切り離されてしまった「私」は、〈世界〉と再び同化するのではなく、意識を〈世界〉の「僕」に譲って「私」は消失することを選ぶのである。

しかし、その選択とは本当にただ失い続けるためだけの結末だったのだろうか。まとめとして、最後にそれについて考えていきたい。

四 おわりに

二つの世界にはどのような影響関係があるかを辿っていくと、最後に二つの世界の関係性が大きく逆転することがわかったと述べた。

しかし、今一度考えてみると、この物語の構造は非常に複雑な間

題を抱えていることがわかる。〈世界〉は〈ハードボイルド〉の「私」の内面世界であり、ある瞬間の「心」を凍結させたブラックボックスそのものである。つまり、「私」にとって〈世界〉は失われた「心」であるはずだ。だが、「私」の現身である〈世界〉の「僕」もまた、「影」を切り離されて「心」を失い、それを探し求めているのである。では、『世界の終り』は、どこにも存在しない「心」を探し続ける絶望的な物語なのだろうか。現実には絶望した、という理由だけで〈世界〉に残るといふ決断を「僕」はしたのであるか。

ここで思い出したいのは、「僕」は『ダニー・ボーイ』を思い出し、「獣の骨」を覚醒させたことで、「心」を取り戻す希望を見出してから、「街」に残る決断を下したということである。「僕」は外の世界に絶望したのではなく、〈世界〉の可能性を信じてここに残ることを決めたのだ。

また、「僕」は「街」に残ることで、恐らく自身と「彼女」は「心」が残っている者として「森」に追放されるだろうと未来を予想している。「街」のルールを破り追放されたとして、「僕」が追い出されるのは消失してしまうであろう外の世界（＝〈ハードボイルド〉ではなく、あくまで〈世界〉の中の「森」なのである。つまり、「僕」の出した〈世界〉にとどまるといふ選択は、『世界の終わり』を本当の「心」を取り戻す物語にしていると読める。

そして、〈ハードボイルド〉でもまた、博士の孫が最後に「私」に、「私」の体を冷凍保存して、いつか復活することができるかもしれない、と希望的な話をする。それは確かにあまりに小さな希望かもしれないが、しかし無視することはできないだろう。

『世界の終り』は様々な喪を描いた物語である。〈ハードボイル

ド〉の「私」は、博士や組織の勝手な思惑で「心」を凍結させられ、自我消失の運命を背負う。「私」自身はその運命に積極的な抵抗をしないことから、この物語の結末は「絶望的なもの」だと読まれることが多かった。しかし、『世界の終り』には確実に希望も描かれている。「古い夢」は覚醒し、〈世界〉の「僕」は本当の「心」を取り戻す可能性に期待を寄せる。この時に、現実世界から消失し、内面世界に留まるという「世界の終り」の「私」と「僕」の選択は、ただ元の通りに「心」を修復するのではなく、本当に求めている「心」の形を取り戻すために必要な結末であったと考えられよう。

注(1) 鈴木和成「ブラックホールとその既視感」

『ユリイカ』一九八九・六

(2) 遠藤伸治「村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論——〈世界〉の再編のために——」『近代文学試論』一九九〇・一二

(3) 山根由美恵「村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』論——ウロボロス——の世界——」『日本文学』二〇〇一・九

(4) 浅利文子「村上春樹物語の力」翰林書房 二〇一三・三

(5) (4)に同じ。

(6) 『物語』のための冒険『文学界』一九八五・八

(7) (3)に同じ。

なお、本文引用は、すべて新潮文庫『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(二〇一〇・四)に依った。